

新人時代再び

会員 生田 和也



2つの新人時代

弁護士になって約5ヶ月が経ったが、私にとって「新人」として働くのは2回目となる。1回目の新人時代は、法科大学院入学前に勤務していたNHK（ディレクター職）で経験した。そして今回が2回目の新人時代であるが、この2つの新人時代は似ているようで異なっていると思う。弁護士になってからの5ヶ月間の反省も含めて、2つの新人生活について書いてみたい。

NHKのディレクターとしての新人時代

民放のディレクターはいわゆるAD生活からスタートするようであるが、NHKのディレクターは、基本的に企画さえ通れば、新人でもメインのディレクターとして取材から撮影、編集、放送まで一貫して番組を担当することになる。つまり、企画さえよければ、新人でも1時間や2時間番組のメインディレクターになる。逆に言えば、新人時代であっても誰かが手取り足取り教えてくれるわけではなく、先輩の番組作りを真似ながら、また、上司に重いため息をつかれながら番組制作を自ら身につけていく。

弁護士としての新人時代

新人弁護士の仕事は事務所によって異なると思うが、先輩弁護士に一から十まで懇切丁寧に教わりながら仕事をする新人は少ないと思う。新人といっても顧問先からの法律相談に回答することがあるだろうし、訴訟になればファーストドラフトを作成することもあるだろう。その度に、先輩弁護士の依頼者との接し方や書面の書き方を真似るとともに、パートナーやボス

弁の事件の舵取りを目の当たりにしながら、事件の見立てや扱い方を覚えていくのだと思う。

似て非なる2回目の新人時代

NHKと弁護士の新人時代は、職種は違えど仕事の覚え方としては近いものがあると感じている。どちらもいわゆるOJTであり、実際の仕事を通して仕事のやり方を学んでいく。また、新人も責任をもって自分の番組／事件を担当するため、担当の番組／事件が終われば早く帰れるし、終わらなければ終わるまで寝食忘れて働き続けることになる。

一方、違いもある。NHKは誰もが知っている組織であるがゆえに、新人は、NHKの看板に守られて仕事をするができる。もちろん法律事務所でも、新人は、ボスやパートナーが作り上げてきた看板の元で仕事をしていることに違いはない。しかし、NHKのように全国津々浦々誰しもが知っている法律事務所はなく、どの法律事務所についても今も看板を作り続けている最中であると思う。そのような中、新人といえども依頼者の方々から「先生」と呼ばれる以上、その仕事次第で法律事務所の看板を汚すこと、さらには依頼者の一生を左右することにもなりかねず、一つ一つの仕事に緊張感が伴う。依頼者からの相談に対して一度回答した後でも、言い知れぬ不安感から再度確認のために調べ直すということもある。

1回目と似ているようで異なる2回目の新人時代は、緊張感溢れる新人時代であると思う。しかし、それ故仕事のやりがいもまた強くなる。このいい意味での緊張感を保ちながら、一つ一つの事件を通して学び、成長していきたいと思う。